letective VS the black orgonization ～最後の勝負～

舞湖　早紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｄｅｔｅｃｔｉｖｅ ＶＳ ｔｈｅ ｂｌａｃｋ ｏｒｇｏｎｉｚａｔｉｏｎ ～最後の勝負～

【Ｎコード】
Ｎ０９７０Ｗ

【作者名】
舞湖　早紀

【あらすじ】
コナンたちがロンドンから帰ってきてから早１ヶ月。
そんなある日１本の電話によって、彼らの運命は狂い出す。
なんと、ロンドンで新一の姿を奴らに見られてしまったのだ。
奴らとの対決、周りとの別れ、、、、
そんな悲しいお話です。

1～突然の電話。

コナンたちがロンドンから帰ってきてから早1ヶ月。

【私の心ぐらい推理してみなさいよ！】

【好きな女の心を、、、、正確に読み取るなんて事はな！】

あの出来事から、蘭と新一は一度も連絡をとっていない。

いや、することができない。

お互い恥ずかしくて。

そんなある日のことである。

「皆さんさようなら！」

「さよーなら！」

ここは帝丹小学校。

1年生は早く授業が終わるため、みんな一斉に下駄箱に向かう。

「おいみんな、今日も米花公園でサッカーしようぜ！」

と元太。彼は相変わらず元気である。

「賛成です。じゃあ、家に帰ったらすぐ集合にしましょう！」

「もちろんコナンも来るよな？」

「あぁ、、、、」

そうコナンが曖昧に答えたときだった。

ブーッブーッ

彼の携帯が鳴った。

（コナンの方だ、、、、誰からだろう？）

そう思って携帯を開けてみると、なんとジョディ先生からだった。

少し彼らと離れて電話を取る。
「もしもし？どうしたの？」
「ｏｈ，ｃｏｏｌｋｉｄ！ちょうどよかった。今授業終わったところ？」
「そうだけど、、、、」
「大至急伝えたいことがあるんだけど、これからすぐ博士ん家にこれる？あのシェリーと呼ばれた女の子も連れて。」
大至急伝えたいこととは何かわからないが、声が緊迫している事からきっと重要なことであろう。
「うん、わかった。すぐいくね。」
そう言って電話を切った。
「おいコナン、誰からだったんだ？」
「わりい！やっぱきょうサッカーはパスな。」
「ええ～何でですか？」
「大事な用事なんだ。ほら、灰原も行くぞ！」
「え？ちょ、ちょっと、、、、」
そして無理矢理灰原を連れて行く。
ほかの３人はあっけにとられていた、、、、

「ちょ、ちょっと！何で無理矢理連れて行くのよ！」
「実はさっき、ジョディ先生から電話があったんだ。重要な話があるから急いで博士ん家に来てくれってな。」
「それって、、、、」
「あぁ。奴らに関する情報の可能性が高い。」
そうコナンがいうと、灰原の顔がすぐに恐怖の顔へと変わった。
２人は黙って博士ん家に向かって走った。

2～驚愕の知らせ（前書き）

更新が遅れてすみません！
これからも不定期更新になると思いますが、よろしくお願いします！

2～驚愕の知らせ

コナンと灰原は、ひたすら博士ん家に向かっていた。
向かい風も遮ってしまうほど一心不乱に。

特に灰原は、いやな予感がしていた。

（もしかしたら組織が、、、、）

その不安を、コナンも背中で感じていた。

彼の額から一粒の汗が流れる。

その汗は、焦り、不安、緊張など、すべての彼の気持ちを表していた。

そんなことを考えているうちに、二人は博士ん家のドアの前まできていた。

灰原は、ゴクリとつばを飲み込む。

そして決心したのか、二人は博士ん家のドアを開けた、、、、

「ｏｈ！　ｃｏｏｌ　ｋｉｄ！ちょっと二人で話したいことがあるんだけど、いいかしら？」
いつもどうりにしているつもりのジョディ先生だったが、コナンには緊張していることが一瞬でわかった。
「いいよ。なぁ灰原、ちょっと地下室貸してくんねぇか？話が終わったらすぐ出てくるからよ。」
「わかったわ。その代わり終わったらすべて教えてちょうだいね。」
（なんか灰原にしては今日は素直だな、、、、ま、いっか。）
「わーったよ。じゃ、ジョディ先生早く行こう！」
彼は感情を表に出さないようにしているが、その瞳を見れば一目瞭然だった。

彼は本気なのだ。

（やっと奴らの情報が入る、、、、！）

そして、灰原のいやな予感は当たってしまうのだった、、、、

二人が地下室に降りていった頃。

「やっと奴らの情報が入ったようじゃの。」
「えぇそうみたいね。でも私、今回いやな予感がするの。今にも組織が動き出しているかのような胸騒ぎが、、、、」

とその時ー

ガチャッ

突然扉が開いた。

「いててててて、、、、」

痛いところをさすりながら現れたのはー

なんと、少年探偵団だった。

「ど、どうしてあなたたちが、、、、」
「ごめんなさい灰原さん。さっきあまりにも急にコナン君が灰原さんを連れて走り出すものですから、気になって後をつけてたんですよ。あはは、、、、」
恥ずかしそうにいう光彦。
「ま、まさかさっきの会話聞いてなかったでしょうね？」
「へ、何の話ですか？」
「よかった、、、、聞いてなかったのね。」
「なんか重要な話でもしてたの？」
「ううん。じゃあ、私はちょっと下に行ってくるわね。」
「ちょ、ちょっと！コナン君は？」
灰原は歩美の質問には答えずに、さっさと下に行ってしまった、、、、

その頃のジョディ先生とコナン。

「で、話っていうのは？」
コナンは単刀直入に聞く。

「実はね、、、、あの組織が動き出したの。」
ためらいがちに彼女は言う。
「ねぇ、ちゃんと教えて！」
「、、、、最初から話すわね。実は今日の朝、水無玲奈から電話があったの。そして彼女は、私にこう伝えたわ。

『ついに組織が動き出したわ！一ヶ月前、ジンの手下がロンドンで、前に彼が殺したはずの人物を見かけたらしいの。でもジンは、最初はその手下を疑ってたらしいんだけど、ついに最近その人物について調べだしたの。そうしたら、その人物はジンが彼を始末した日から、何回か目撃されている事がわかったの。それでついに今日、彼を殺すべく全力で探しているみたい。でもね、探しているのが米花町のすぐ近くなのよ。だから、あなたたちも気をつけた方がいいわよ！ジンは、きっと一気に片をつけるつもりだろうから。とにかく、気をつけてね！』

ってね。」
コナンの背筋に悪寒が走る。
「それで、その人物って誰なの？」
彼は覚悟を決めた。

しばし、沈黙が続く、、、、

「それはね、、、、」
ジョディ先生が、一呼吸置く。
、、、、いやな予感がする。

しかしこれを聞かないことには、何も始まらない。

死んだと噂される、高校生探偵の

工藤新一。

2～驚愕の知らせ（後書き）

なんか、ストーリー展開が早くてすみません！

もし、質問やアドバイス、感想などがありましたら、よろしくお願いします。

3～まさか・・・・（前書き）

投稿するのが遅くなって、大変申し訳ありません！
いろいろ、試験などがあったもので・・・・

これからは、基本日曜日に更新すると思います。

なので、この未熟者に最後までおつきあい下さい！

3～まさか・・・・

しーんと室内は静まりかえる。

最初に口を開いたのは、コナンだった。

「それ・・・本当？」

彼の声は、全く力がなかった。

「えぇ・・・・・」

ジョディ先生は、やや遠慮がちに言う。

いつもと何かが違った。

「だったら全部俺のせいじゃねーかよ。どうすんだ・・・・」

彼は一人で頭を抱える。

「それってどういうこと？」
ジョディ先生がわからないのも無理はない。

そして、コナンは腹を決したのか、すべてを話した。

工藤新一＝江戸川コナンだということ。
トロピカルランドでの出来事。
灰原哀について。
ＡＰＴＸ４８６９のこと・・・・

「やっぱり・・・・・」

ジョディ先生が最初に言ったのは、この言葉だった。
「え？！」
当然ながら、コナンは驚いた。
「私、うすうす感づいていたのよ。まさか、本当だとは思わなかったけれど・・・・」

ジョディ先生にまで感づかれるとは、コナンもうかつだった。
もうくやんでも、仕方がない。
だからコナンは、強引に話を変えた。

「とりあえず、工藤新一に関わった米花町の人、特に蘭、おっちゃん、園子、阿笠博士、そして灰原を気付かれないようにガードしてくんないか？」
「わかったわ。でも、あなたはどうするの？ガードしておいた方がいいんじゃない？」
確かにそうだ。標的は彼なのだから。
「いや、逆にそれは危険だ。奴らに気付かれる可能性があるから。」
「そうね・・・・とにかく、ＦＢＩの本拠地に行きましょう。話はそれからよ。」
「あぁ。じゃあ、灰原も来いよ。」
コナンのその一言で、灰原は物陰から出てきた。
「え？哀ちゃんいたの？！」
ジョディ先生は気付かなかったようだ。
「えぇ・・・・あなたは、いつから気付いてたの？」
「最初っから気付いてたさ。」
彼は当たり前という風な口調で言った。
「とにかく、早く行きましょう！」
言い出したジョディ先生を先頭に、３人は駆け上がっていく。

この後、どんな悲惨なことが起こるとも知らずに・・・・

3～まさか・・・・（後書き）

相変わらず短いですね（汗）

ところで、聞きたい事があるんですけど、皆さん何派ですか？
私は絶対新蘭派です！
ちょっとコ哀や新志は嫌ですね・・・・

ということで、感想やアドバイス、質問の答えをお待ちしております！

４～動き出した奴ら（前書き）

ほんっとうに更新が遅くなってすみません！
またいろいろとありまして・・・・

なので今日になってしまいました。
期待してた方、すみません！

4～動き出した奴ら

一方、アジトにいたジン達は・・・・

「まさかあの毒薬で始末したはずのガキが生きていたとはな・・・・」

部屋にいたのはジンとウオッカの二人だけだった。

「しかしどうして生きてたんですかね？あれは絶対に死に至る毒薬だというのに・・・・」

ジンが工藤新一に毒薬を飲ませているのを見たウオッカは、疑問に思ったようだ。

ジンがたばこの煙をフーッと吐き出す。

それがすぐ近くにいたウオッカにもわからないくらい、部屋は闇に包まれている。

一筋の光も差していなかった。

「あいつ、あのとき拳銃で殺されなかったのは運がよすぎたな・・・

・」
「どういうことですか？」
彼は不気味にニイーっと口角をつり上げた。
「実は、あのガキに飲ませたＡＰＴＸ４８６９には特例があるかもしれねーんだ。今、研究室にいるすべての人手をそれを調べることに使ってるぜ・・・・」

でも、前からジンは工藤新一が生きているかもしれないということをうすうす感づいていた。

・・・・・・・あのときから。

『おまえは何者だ。』

『・・・・・探偵だ』

シェリーをあのホテルで見たあのときから。

あれがもし工藤新一であったら。

あの爆発で死んでいなかったら。

・・・・・・ジンはクビになるどころでは済まない。

公開死刑になるかもしれない。

・・・・・待ってろよ、工藤新一・・・・・！

果てしない暗闇の中に、彼の不気味な笑い声が響いた。

4～動き出した奴ら（後書き）

またまた分けわからなくなってしまいました（汗）

ここでまた質問です！

皆さんはコナンと新一、どっちの方が好きですか？

うー・・・ん。

私はどっちもだーーーい好きですけど、どっちかというと新一かなぁ。

なんか新一の方が好きなんです！

引き続き感想やアドバイス、質問の答え、リクエストなどお待ちしております！

5～ついに姿を現した組織（前書き）

すみません～～～～～～～m（__）m
また日曜日に更新できませんでした・・・・（涙）

最近文化祭が近づいて来ていて、毎日休日も部活なんですよぉ・・・・
今日は特別に休みだったんで、更新できたんですけど（T_T）
今回はどうにかこれでお許し下さい！

5～ついに姿を現した組織

その頃、コナン一行８人はＦＢＩの本拠地に来ていた。

「こんなに近かったのね、ＦＢＩの本拠地・・・・」
あくびをしながら言う灰原は、緊張感など一切感じられなかった。
「・・・・ってかお前、今はそんなのんきなことをいってる場合じゃねーだろ！」
それに反して、コナンは高ぶる気持ちを一生懸命抑えながらジョディ先生が話を切り出すのを待っていた。

そんな会話をする二人を見て、ただ少年探偵団は呆然としていた。

「な、何で僕たちはこんなところに連れてこられたんでしょう？」
光彦が小さな声で歩美と元太に話しかけた。
「さっきからコナン君も哀ちゃんもなんか怪しいし・・・・」
どうやら３人は２人を疑っているようだ。
「なんかうまいもんの話してんのかなぁ？」
「それはきっと元太君だけですよ・・・」

光彦は苦笑い。

一方コナンと灰原、阿笠博士、ジョディ先生はＦＢＩのボス、ジェイムズと話をしていた。

「とりあえず、ボスは水無玲奈から来た電話の話は知ってますよね？」

ようやく本題が切り出された。

「あぁ。それに君、江戸が・・・・じゃなくて工藤新一君が深く関わっていることも。」

そう言われてしまったコナンは、顔が少し青くなる。

「こんなところまで知られていたのか・・・・」

「これじゃあ、組織にも知られている可能性が高いわね・・・・アイリッシュの件もあるし。」

「誰？アイリッシュって。もしかして、奴らの仲間？」

事件のことを詳しく知らないジョディ先生達に、コナンはすべて話した。

水谷さんのこと（すみません！名前忘れました・・・・）。東都タ

ワーでの出来事。アイリッシュが松本管理官に変装していたこと。組織が壊したメモリーカードのこと。アイリッシュに正体がばれていたこと・・・・

「そんなことがあったのね・・・・全然知らなかったわ。」
初めてそのことを知ったジョディ先生は、厳しい表情をしていた。
「実際、俺の指紋を照合すれば一発でばれるからな・・・・」
コナンも同じく厳しい表情をしている。
「まぁとにかく、その話は別として、君(コナン)の周りの人には護衛をつけよう。もちろん、気付かれないように・・・・」
ジェイムズが承諾した。
「ありがとうございます。特に、灰原を護衛して下さい。後、僕の護衛はいりませんから。」
「何で？あなたが一番危険なのに。」
ジョディ先生は一番コナンを護衛させるつもりだったようだ。
「逆に感づかれたらいけないでしょう？」
「それはそうだな。では、健闘を祈っているぞ。」

とりあえず話に決着がついたコナンとジョディ先生は、訳わからなくなっている3人も含めて、ジョディ先生の車に乗り込んだ。

しばらく走った頃、ようやく3人の緊張もほぐれてきた。

その時、すでに魔の手はすぐ近くまで迫っていた。

突然、灰原がコナンの手を握りしめた。

「ど、どうしたんだ灰原？」

「や、奴らの気配がするの・・・・・・すぐ近くに・・・・・・」

その怯えようは半端ではなかった。

ふと、コナンはバックミラーを見た。

そこには・・・・・・

「ジン達?!?!?!?!?!?!?!?!」

夕焼けにも染まらない、真っ黒なポルシェＡが映っていた。

5～ついに姿を現した組織（後書き）

ようやくちょっと話が進みました＊
がんばって、できればこの連載を今年中に終わらせたいです！
果たして終わるのだろうか・・・・・・・

まぁ、それはともかくとしていかがでしたか？
そして・・・・・・また質問ターイム！
皆さんは、劇場版名探偵コナンのなかで、どれが一番好きですか？
私はうーんと・・・・・・
漆黒の追跡者かな？
でも、どれも好きですよ！

引き続き、感想やアドバイス、質問の答え、あと私これからもう一つ小説を書こうと思ってるんです！そのためのアイデアもお待ちしております！

6～奴らとの第1戦（1）（前書き）

へへっ☆
今回だけ二日連続連載しました！

あと、前に言った【日曜日に更新する】という約束は忘れて下さい・・・・
もうなんだかんだ言ってめちゃくちゃになってしまったんで（失笑）
というわけで、これからは不定期連載になると思います！
多くても一週間に一度ですかね・・・・

とにかく、これからもよろしくお願いします（＾０＾）／

6～奴らとの第1戦（1）

「ど、どうしたの？」
突然大きな声を上げたコナンにびっくりして、ジョディ先生は後ろを振り返った。
すると・・・・・・

ジョディ先生も真っ黒なポルシェ３５６Ａを見てしまった。

「ちょ、ど、どうして？」
突然のことに、ジョディ先生は気が動転してしまっていた。
「俺にもわからない！だけど、ジョディ先生の車を狙っていることは確かだよ！早く、奴らを振り切って！」
「わかってるわ！でも、あっちがあのスピードじゃ、追いつかれてしまうわ・・・・」
ジョディ先生も必死に対応している。
それでも、あっちのスピードは落ちるどころか、だんだん増していっていた。

運転席で必死に奴らを振り切ろうとするジョディ先生。後部座席で指示を叫んでいるコナン。同じく後部座席で震えてコナンにしがみつく灰原。

そんな3人を見て、少年探偵団はあっけにとられていた。
「な、何が起こったんでしょう・・・・・」
「誰か変な人が追ってきてるみたいだよ・・・・」
光彦に恐怖のあまりしがみつく歩美。
「や、やべぇじゃん！」
元太はパニックになっている。
「おい、おめぇら、よく聞け！今俺たちは変な車に追われている。が、落ち着け！きっと大丈夫だから。」
突然コナンが大声を上げた。
「は、はい・・・・」
素直に3人はおとなしくなった。

それでも、そんなことを話しているうちに、どんどん距離が縮まっていく。

残り約、２００メートル。

１５０メートル。

１２０メートル。

１００メートル。

さらにスピードを上げて距離が縮まっていく。

残り約、９０メートル。

５０メートル。

「もう無理よ！追いつかれてしまうわ！」
ジョディ先生は叫び声を上げる。

残り約、２０メートル。

「・・・・はっ！行き止まりだわ！」
仕方なく、車はスピンしてジンの車に向かい合うように止まった。

残り約、３メートル。

そしてようやく、ジンの車も止まった。
「久しぶりだな、ＦＢＩ・・・・！」
にいっと口角をつり上げ、不気味に笑う。

「あなたたちは、車の中にいてね・・・・」
ジョディ先生も腹を決したのか、ゆっくり銃を構えながら車を降りた。

背筋がぞくぞくする。
それでも、ジョディ先生は負けずにジンをにらみ返す。

「さらばだ、ＦＢＩのジョディ・スターリング捜査官。」

パアァン

１発の銃声がなった。

「うっっっ・・・・・」
しかし、倒れたのはジンの方だった。

（いったい誰が・・・・・？）

そこにいたのは、一人の男だった。

6～奴らとの第1戦（1）（後書き）

なんか今回はやたらと長くなってしまいました・・・・・
次回は、いよいよ本格的に組織との戦いが始まります。
少しグロくなるかも。

あ、でも灰原やコナンは死ぬことはないのでご安心下さい！
引き続き感想やアドバイスなどお待ちしております★

7～奴らとの第1戦（2）

ーーーーーーーーーーその男の正体とは。

「とりあえず、今日は観念したら？もっとけがするよ。」
奴らに向かってそんなことを言った男とは。

おそるおそる顔を上げて、コナンが前のガラスからその男を覗く。

凛としたその顔は、新一にそっくりだった。
しかし、新一には兄弟や似ている親戚はいない。
いったい彼は何者なのか。

「ふっ・・・・まぁ、そうしてやるか。」
なぜか、ジンが簡単に引き下がった。
そして、彼は彼の愛車ポルシェ３５６Ａに乗ってどこかへと行ってしまった。
あっけにとられていたコナン達は、その後すぐ“カシャン”と何かが落ちる音がして、ようやく我に返った。
奴らがいなくなったので、コナンはそーっと車を降りてその落ちたものを拾いに行った。

そこまで歩く途中、その男とも目が合う。
が、それも無視して落ちたものを拾った。

それは・・・・・・

何かのデータが入ったフロッピーだった。

コナンがひっくり返してみる。

そしてそこに書かれていたのは・・・・・・

【ＡＰＴＸ４８６９】

「なにっー！？」
コナンは驚くばかり。

いろんな考えが彼の頭の中を駆け巡る。

これは何かの罠ではないか。
嘘かもしれない。
もしかしたら、これで俺を試しているのかもしれない。

しかし、どれにしても最悪だった。

つまり、ジンがわざとこれを置いていったということは、少なからず灰原かコナンの正体がばれているということ。
ＡＰＴＸ４８６９に幼児化する作用があるということを奴らは知っているということ。

「くそっ・・・・！」
とりあえずこのことを話すため、コナンは車に向かう。

ーその時。

「お久しぶりです、名探偵。」
頭の上から声がかかった。
声をかけてきたのは、さっきのあの男だった。

ん？ということは・・・・・・

「おまえが怪盗キッド！？」

そう。あの男とは、怪盗キッドこと黒羽快斗だったのだ。

7～奴らとの第1戦（2）（後書き）

かなり更新するのが遅くなってしまいました（汗）
しかも急いだので短いです・・・
まぁ、そこは不定期更新ということでお許し下さい！

ところで話変わりますが、私もう一つ小説の連載を始めました！
題名は『君を探して』です。っていうかこれ若干宣伝になってますよね・・・
もしよかったら、そちらもご覧下さい！

8～協力者の現れ

とりあえず話を聞こうと思い、コナンはキッドを阿笠博士の家に連れて行った。
もちろん、フロッピーのことも一緒に。
そんな中、キッドだけは普通にしていた。

そのとある場面がこれである。

「んで、何で俺たちを助けたんだ？」
来客用のいすに腰掛けたコナンは、一息ついてから話を切り出した。
「何でジンのことを知っていたのかも知りたいわね。」
灰原も鋭い質問を投げかける。
「まぁ、それは順を追って説明するよ。とりあえず、自己紹介するぜ。俺は怪盗キッドこと黒羽快斗だ。よろしくな、新一・・・・でいいのかな。」
「あぁ。ところで快斗、おまえは俺のことどこまで知ってるんだ？」
一応お互いの名前も知ったところで、少し緊張が解ける。
そこで快斗は知っていることをすべて話した。

変な毒薬を飲まされて新一が縮んだこと。それである組織を追っていること。
そして・・・・・・唯一の自分のライバルであること。

「ちなみに変な薬じゃなくて、ＡＰＴＸ（アポトキシン）４８６９な。本当は死ぬような強い毒薬だったけど、俺たちは運良く幼児化したんだ。」
案外よく知らない快斗に、コナンは内心少しあきれていた・・・・

（めんどくせぇけど・・・・最初っから説明するか。）
「なんで『俺たち』なんだ？」
素っ気なくいう快斗。
（こいつ何にもしらねぇのかよ・・・・）
仕方なく、コナンはすべて最初っから話した。

蘭とトロピカルランドに行ったとき、黒ずくめの男達にＡＰＴＸ４８６９を飲まされたこと。奴らの情報を得るために江戸川コナンと正体を偽って毛利探偵事務所に居候している事。灰原はＡＰＴＸ４８６９を開発した張本人の宮野志保であること。彼女の姉、宮野明美が殺され組織を抜けようとしてＡＰＴＸ４８６９を飲み、体が幼児化したこと、ｅｔｃ・・・・

「へぇーそんなことがあったんだ・・・・」
関心しきりな快斗とは裏腹に、コナンはいらいらしていた。
（あ～～～もうこんなやつと組織に何の関わりがあるっていうんだよ！！）
「じゃあ今度は俺が自分のこと話すわ・・・・」
ここでようやく快斗が自分のことを話し始めた。

自分の父を殺した組織を追っていること。そのために、2代目怪盗キッドとして活動していること。そして、その組織がパンドラのビックジュエルを狙っていること、ｅｔｃ・・・・

「その組織が俺らが追っていた組織と同じだった訳ね・・・・」
さっきまでいらだっていた表情はどこへやら・・・・
コナンはすっかり探偵の顔になっていた。
「そういうこと。だから関係があるんじゃないかと思ってさっき新一に声をかけたんだ。」

そして意気投合した2人は、今までの戦いの話に花を咲かす。

突然、コナンが何かを思い出した。
「あ！！」
「どうしたんだ新一？」
快斗は突然変なことをいったコナンに、普通に問いかける。
「そういえばこれ・・・・」
そう言ってコナンは先ほどのフロッピーを灰原に渡す。
「？？何これ。」
「裏を見てみろ・・・・」
いわれるがままに裏返した灰原は・・・・・
とたんに顔色が変わった。

「こ、こんなのどこにあったの?!」
「さっき、ジンが落としていったんだ・・・・」
「っということは、奴らが2人の秘密を知っていて、何かを仕掛けてきている可能性が高いな。」
快斗はコナンが言おうとしていたことをさらりと言う。
「でも、これがあれば・・・・・」

ＡＰＴＸ４８６９の解毒剤ができるかもしれない。

３人が考えたことは一緒だった。

そして、中身を見るべく、３人は地下室へと向かっていった・・・・

・

その背中は、阿笠博士には勇ましく見えたーーーーー

8～協力者の現れ（後書き）

またまた遅くなりました（汗）

っていうか今回の終わり方おかしいですよね・・・・

しかも阿笠博士最後まで忘れ去られてるし（。。；）

とにかくこれからもよろしくお願いします！！

9～可能性

フロッピーをパソコンの中に入れてから、灰原はずっとキーボードをたたいていた。

カタカタカタ・・・・・

そんな心地よい音が耳に響く。
でも、現状はそんなんじゃなかった。

必死にパソコンをにらんでいる灰原。

その画面を食いつくように見つめるコナン。

そんな二人を心配そうに見つめている快斗。

それぞれがいろんな思いを抱き、結果を待つ。

「・・・・・ようやくプロテクトを破れたわ。」
疲れたように、灰原が言う。
もう時間は9時を回っており、調べ始めてから4時間がたっていた。
「ほんとか!?じゃあ、これで解毒剤が・・・・・」
「そうよ。もし、このデータが間違っていなければ、ね。」
うれしそうなコナンに、灰原は冷静に返す。
「もし、このデータが嘘だった・・・ら?」
「死ぬ確率が高いわね。」
そこまで言われて、さすがにコナンも黙る。
というか、返す言葉がないのだ。

灰原が言っていることは間違ってないし、むしろ正しい。

一刻も早く解毒剤を作ってほしいのに、《死ぬ》と言われると怖くなる。

所詮、人間はこんな弱い生き物なのか・・・・・

「でも、可能性にかけてみようじゃないか。」
そんなコナンの考えを見透かしたのか、快斗が代わりにしゃべる。
「ええ。でも、これだけは覚えておいて。奴らが私たちにＡＰＴＸ４８６９のデータをわざと渡らせたって事は、少なくともどちらかの正体がばれているって事なのよ・・・・・」
「だろうな・・・・・」
「だったら、私は解毒剤作りに専念したいから、出て行ってちょうだい。」
「「はーい」」
仕方なく、二人は阿笠博士の家を後にした。

真っ暗な夜空に、無数の星がきらめいていた。
その中に、一つだけ赤い星がやけにくっきりに見えた。

その時、彼らは知らなかった。

この星の色が、鮮血の色をしていることに。

もしかしたら、この星が暗示していたのかもしれない。

この先、恐ろしいことが起こることを・・・・・

9～可能性（後書き）

約2週間ぶりの更新となりました！
遅くなってすみません・・・・
とにかく、これからもよろしくお願いします！

１０～あの時の理由

一方、その頃ジン達は。

この前と同じ闇に飲まれた部屋にいた。

この前と違うのは、少しジンが焦っているぐらいだ。

それはなぜ・・・・・？

「しかし兄貴、何でシェリーにわざとＡＰＴＸ４８６９のデータを渡らせたんすか？あいつは裏切り者じゃ・・」

フッとジンが不敵に笑う。

「そのすべては、あの方のためだ。」
「それがどうして・・・・」
状況が理解できないウオッカは、？マークでいっぱいだった。
「おまえは知らないのか？あの方が苦しんでるのを。」
「そ、そういえばこの前会ったとき、弱ってた気が。」
「そうだ。最近、風邪気味だったあの方は、誤ってＡＰＴＸ４８６９を飲んでしまったのさ。」

～回想～

「ゲホッゴホッ・・・・ん、何だこれは。風邪薬か？」
そう言って彼はその薬に手を伸ばす。
「・・・のようだな。」
そして水道からコップに水をくみ、薬を口の中に入れる。

ゴクッ

「うっ・・・！」
突然彼の体に激痛が走った。
骨も溶けそうなくらいの痛みに、彼はのたうち回る。
運悪く、ジンがそこにやってきた。
「ど、どうされました？！」
「あ、あそこにあった薬を・・・・ガクッ。」
彼は気を失ってしまった。

ジンは彼が指さした方を見る。

そこはーーーーー

（俺がＡＰＴＸ４８６９を置きっぱなしにしていた場所！）
冷や汗がジンの額を伝う。
（どうにかせねば・・・・）

～回想終了～

「・・・というわけだったんだ。」
「それで、シェリーに解毒剤を作らせようって算段ですね。」
「あぁ。もちろん、用が済んだらこれだがな。」
ジンは首を切るまねをする。
「それなら、工藤新一はさっさと殺してもよかったんじゃないっすか？」
「いや、あいつがいないときっとシェリーは解毒剤を作らない。あいつのことだから相当な罪意識はあるだろうしな。」
「だったら、あの方のお見舞いに行きましょう。大丈夫だ、と伝えるために。」
「・・・だな。」

そして二人は歩いて行く。
あの方のいる部屋へ。

誰もが予想するはずもなかった。

あの毒薬がＡＰＴＸ４８６９じゃないなんて・・・・

その後のコナン。

「ただいまー！」
そう言いつつ、コナンは毛利探偵事務所に入っていく。
「今までどこに行ってたの！？心配したじゃない。」
蘭に怒られつつ、彼は適当な嘘をつく。
「えへへ・・・博士の家に行ってたの。」
「連絡ぐらいしてくれてもいいのに。」
「・・・ごめんなさい。」
「わかったならいいわ。だって、コナン君も新一みたいにいつか突然消えちゃいそうで・・・」
少し涙目になる蘭。
（ごめんな、蘭・・・）
コナンは心の中で謝る。

「さあ、これからご飯にするわよ！今日はコナン君の大好きなハンバーグだよ。」
「わーい！やったぁ！」

ふとコナンは思った。
こんな平和な生活が続くことがどんなに幸せなことか。

「「「いただきます！」」」

そして、こんなにも平和な『江戸川コナン』としての生活は、あと少しで終わりを告げることとなる。

１０～あの時の理由（後書き）

きゃっほーーー（＾０＾）
一昨日にようやくテストが終わって、超ハッピーです！
でも、きっとテストの結果はさんざん・・・・

それはさておき、ようやく話が進んできました。
もうアイデアが無くって、友人Ｍに毎日求めてるのが現状です・・・
なので、アドバイスや感想、アイデアなどありましたらよろしくお願いします！

１１～醒めない悪夢（前書き）

今回は蘭視点です。

11～醒めない悪夢

ここは何処？

全く見覚えのないところに私は立っている。

周りは轟々と燃える火に包まれて、息が苦しいくらいだった。

「はあっ、はあっ・・・・」

そんな中、私は必死に出口を探す。

その時ーーー

パアァァン

銃声がした。

その音につられるように、どこかへ向かっていく。

足が止まった。

見たくないものを見てしまった。

なのに、足がすくんで動けない。

そこには、一人の男と新一がいた。

その男は長い銀髪で、鋭い目つきで新一をにらんでいた。
しかも銃を向けて。

その銃の矛先となった新一は、さっき撃たれたのか胸のあたりを押さえながら息を切らしている。
そこから流れるのは・・・・

大量の血、血、血。

「さらばだ、工藤新一。」

男は引き金に指をかける。

「くそっ・・・・はあっ、はあっ・・・・」

新一は必死に抵抗しようとしたが、無駄だった。

次の瞬間ーー

パアァァン

新一は撃たれていた。

「うっっっ・・・・」

そして新一は静かに崩れ落ちる。

まだかろうじて息はしていた。

ーはずなのに。

少し目を離した隙に・・・・・

新一は息だえていた。

銀髪の男にかまわず、私は新一に駆け寄る。

「新一？新一？・・・・・・・・新一いいいい！！！！！！！」

「あれ・・・？」

目を開ければ、見慣れた天井があった。

「夢か・・・・」

ここ一週間くらい、この夢しか見ていなかった。

そして毎日汗だくで目が覚める。

しかも、これがただの夢の気がしなかった。

何かが新一に忍び寄っているようで。

・・・怖かった。

だから安否を確かめたいのに、新一は電話に出てくれない。

そして不安はどんどん募っていく。

でも、それを隠して今日も一日を過ごす。

これが正夢ではないことを信じて・・・・

１１～醒めない悪夢（後書き）

少しずつ進んできました！
本当にこうなってしまうんでしょうかねぇ？

それはさておき、まさかの来週は更新できません。
・・・・のはずだったんですが、頑張って予約更新しようと思います。
できなかったらすみません！

とにかく、これからもよろしくお願いします！

１２～忍び寄る恐怖

今日も、またジンとウオッカはボスの見舞いへ行っていた。

しかし、彼の病状はどんどん悪化していく。

それにジンも焦りを感じ、毎日ボスからの司令を待っていた。

そしてついに今日、久しぶりの指令が出た。

ーボスの部屋。

「げほっごほっ・・・・・はあっ、はあっ・・・・・」
彼の息は荒く、乱れていた。
「だ、大丈夫ですかボス。」
それを心配したジンが、声をかける。
「ああ・・・・」
「早く、シェリーにに解毒剤を作らせないとやばいっすね。」
ウオッカがその話を切り出す。
「そうだ、これを・・・げほっごほっ・・・」
そう言って彼が差し出したのは、二通の手紙だった。

両方共裏に挑戦状と書いてある。

「こっちは工藤新一に、かなりの脅しをかけた上で渡せ。銃で撃ってもいいが、殺すなよ。おもしろくないから。」
「わかりました。それで、こっちは？」
「シェリーに渡せ。そいつだけにな。ただ、こっちだけは見るな・・・・っはあっ、はあっ・・・」
「わかりました。ですから、少しお休み下さい。」
「あぁ・・・」
「では、失礼します。」

そう言って二人は出て行った。

彼はさっきまで我慢していたうめき声を漏らす。

「うっ・・・・」

彼が押さえていたのは・・・・

足だった。

痙攣が止まらず、必死に押さえている。

そんなことを知るよしもなく、ジンとウオッカは挑戦状を渡すべく米花町に向かっていった。

１２～忍び寄る恐怖（後書き）

今回は短めです。
果たして、ジンはこんなにボスに尽くしているのか？
などとたくさん疑問がわいてくる一話です。
・・・急いで予約更新したので（^＿^；）
とにかく、これからもよろしくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0970w/

---

detective VS the black orgonization ～最後の勝負～

2011年11月27日12時58分発行